ホリディイン東京

I

夏の終わりは、地獄の始まり。

いよいよ受験まで半年と迫っている。なのに何のココロの準備もない。この時期になると、僕が通う、都立中程度高校のクラス内の空気も、はっきりふたつに分けられるようになる。

ひとつは、殺気だった現役突破悲願組。

もうひとつは、アキラメ自嘲、予備校志望組。

片方は、補習に塾に講習に、と余念がなく、もう一方は、麻雀にパチンコにナンパと、人生享楽派へと転向する。どちらにも言い分はあって、

「ここで努力を放棄するあいつらは、一生ウダツのあがらん下積みさ。それにひきかえ俺たちは、今の苦労を踏み台に、見ていろ来年、晴れて大学生、ナンパし放題」

「ナンの、人生そんなにうまくいくもんか。浪人生活こそが心を豊かにし、人格に幅を持たせる良き経験だ」

進路相談の担任も、そこのところをよくわかっている。

「冴木隆、志望校は？」

「はい、一応、あの早慶を含めた六大学というところで。あの、一ヵ所、税金でまかなわれている大学に関しては、やっぱり納税者でもないのに行っちゃ、マズいかなー、なんて……」

「はい、わかった。予備校の資料によく目を通しておくように。次――」

てな具合。

よしんば大学に受かっても、我が家には入学金をまかなうだけの経済的余裕なんてものがあるかどうかが、一番の疑問ではある。

申し遅れたが、我が親父、冴木涼介の職業は私立探偵。広尾は、明治屋の裏にあたる、サンタテレサアパートメントの二階には、筆記体のネオンサインで、

SAIKI INVESTIGATION の文字が光っている。

インヴェスティゲイションの意味がわからない間抜けが、ときおりエアロビクス教室だの、アスレチックジムだのとまちがえてやってくる。

一階には喫茶「麻呂宇」があって、ここの圭子ママこそが、今や超一等地化したこのサンタテレサアパートの大家さん。あるとき払いの催促なしという家賃（これも四年すえおき）は、すべてハードボイルド大好きの圭子ママの好意によるものだ。

「麻呂宇」には、もうひとり、バーテンダーの星野ドラキュラ伯爵がいる。白系ロシアの血をひく、この無口なおじさんは、クリストファー・リー（最近は深夜映画ですらお目にかかれない。レンタルビデオなかりせば、とうに過去に人だよね）もカクヤといわんばかりのシブさ。近くの某有名女子大には、この伯爵ファンクラブがあって、一夜のお情けを乞うホラーマニア女子大生が列をなすと聞いている。

その日、現役悲願組、開き直り享楽組のどちらにも与しないまま、地下鉄広尾駅で皆に別れを告げた僕が、「麻呂宇」のカウンターに辿りついたのは、午後四時を十分ほど過ぎた頃合だった。

店内は、「お茶してる」女子大生数組（だいたいこの女子大生を眺めているだけで、僕の向学心は衰える。化粧と遊び場、男の話以外に、奴らはすることないのかね）がいるきりで、涼介親父の姿はなかった。

「おかえり、隆ちゃん。どうだった、進路相談？」

二十は確実に年下のおなごたちと秋の肌のお手入れの話題に盛りあがっていたママが、カウンターから振り返った。

「問題なし。全志望校、好きなだけ受けていいって。ただし、その受験料は財形貯蓄に回すべきだって顔してたけど」

「焦ることないわよ」

でしょうとも。四十を幾つか過ぎて、そのファッションセンスが原宿竹下通りの少女たちとも競えることを証明しているママの言葉には重みがある。

「親父は？　上？」

カウンターで、僕のためにウインナコーヒーをたててくれていた星野さんが首を振った。

「やれやれ。愛しい息子のために、いくら裏口資金を積む用意があるか、相談しようと思ったのに」

僕は溜息をついて、鞄の中からマイルドセブンをとりだした。クラスでは今、禁煙が流行っている。現役悲願突破組が、大願成就のためにおこない始めたのだ。その嫌煙運動のあおりを受け、おちおち煙草も吸えない高校生活だ。

思いおこせば、物心ついて以来、僕は親父に、「何々をやるな」といわれたことはない。だいたい本人が、職を転々と変え、

「商社マン」に始まり、

「オイルビジネスマン」

「ルポライター」

「行商人」等々、
あげくに、
「秘密諜報員」ときたものだ。ヒミツチョーホーイン、なんとなくアルフレッド・ヒチコックのモノクロ画面を見ているような言葉の響きではないか。
早い話が、暗黒街の住人であったと、僕は読んでいる。それでも、多少は国家権力につながりがあるらしく、ときおり内閣調査室かどこかのおこぼれ仕事を頂戴している。
労働意欲欠如、責任感欠如、向上心欠如、愛国心欠如、の涼介親父に依頼するのだから、国家権力もアテにならない。
待てよ。「歩く国家権力」、内閣調査室フクシツチョーの島津さんとは、僕も知らない仲ではない。島津さんに頼めば、トーキョー大学の裏口入学を斡旋していただけるかもしれない。
そんな馬鹿なと、考えるのは、世の中の素人だ。親父の下で、アルバイト探偵の修業を積み、この世には、かなりマカ不思議、奇妙キテレツなことがまかり通っているのを、僕は見てきた。

この続きは、書籍でお楽しみください。
◎注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。